

## 1. 在郷町内子・五十崎にみる歴史的風致

□はじめに

内子と五十崎の中心部は江戸期を通じて大洲藩の在郷町として存在した。周辺地域へつながる街道や小田川など流通の利便性などから和紙や木蠟（櫨の木の実からとれる蠟）の生産が盛んになり、また一方で交易の要衝として発展し、「まち」が形成されていった。

ここでは、「在郷町」として形成された内子・五十崎の中心部を

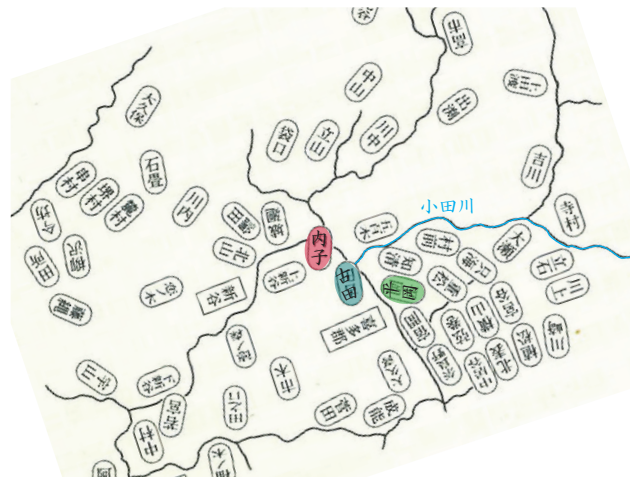
- 1) 在郷町の<sup>たたず</sup>佇まいをつなぐ町並みとその保存にみる歴史的風致
  - 2) 地域に根づく手漉き和紙と大風合戦にみる歴史的風致
  - 3) 時を超えた芝居小屋にみる歴史的風致
  - 4) 地域の味、醸造業にみる歴史的風致
  - 5) 内子・五十崎の祭礼にみる歴史的風致
- という切り口でみていく。

この隣接する内子・五十崎は、同類の在郷町としての歴史を持ちつつも、個々の特性をもって現代まで発展してきた。

□在郷町としての歴史

内子・五十崎地区における在郷町としての大きな特徴は、山間部で栽培された原材料が、水陸両方の輸送手段によって運ばれ、中心部で加工、出荷されるという形態が挙げられる。それが和紙や木蠟の生産である。

木蠟生産は内子地区を中心に明治中期に最盛期を迎え、和紙生産は五十崎地区を中心に明治後期から大正期が最盛期とされる。当地区において現代に残る歴史的建造物は、この在郷町としての発展とともに建てられており、特に木蠟生産については大正期に途絶えてしまったが、当時の建造物とその繁栄を物語っている。和紙生産については時代の変遷をへて今もなお続き、五十崎の伝統行事大風合戦と相まって地域に根付いている。



明治9年発行「愛媛県管内略界」より作図（内子町誌）

※古田、平岡：現在の五十崎



昭和30年の内子本町商店街



昭和29年の五十崎牛市

一方で内子の中心部においては、寛政12年(1800)の『大洲旧記』によると、14世紀中頃に「市」が立っていたとされ、盛衰を経て江戸期まで続いた。五十崎では元禄年間(1688～1704)頃から牛馬大市が四国随一の規模で賑わったと伝わる。明治以降、これらが元となり現在の商店街の形を成していった。このことは047ページ図「内子・五十崎の市街地形成過程」からも街道沿いにまちが形成されてきたことがわかる。

商店街の形成や発展は、内子・五十崎とも先述の製蠟業・製紙業の繁栄が背景にあることはもとより、同様に交通の要衝であったことの影響も大きい。明治後期から大正期にかけては通り沿いに宿屋や料理屋、置屋(芸者などを派遣するところ)、菓子屋、呉服屋、医院、造り酒屋なども軒を連ねるようになった。今なお営業を続けている店舗も多い。卸業も発達し、日吉(現鬼北町)や卯之町(現西予市)までも商圈とする店もあった。

これらまちの賑わいは、地域に娯楽文化の発展ももたらした。江戸後期からは人形浄瑠璃が農閑期に楽しまれ、次第に仮設の小屋掛けを設けたり、自ら浄瑠璃を語る愛好家も増えたりした。そのような中、常設の芝居小屋が地域の名士たちによって建設・興行されていった。内子地区には大正期

に建てられた内子座や旭館が今なお地域の人々に親しまれる娯楽の場として、また文化・芸能の拠点としてあり続けている。

酒造業については、内子地区においては弘化4年(1848)の『六日市永久録』に「酒家4軒」の記載があり、江戸期から造り酒屋が営まれていたことが分かる。明治29年(1896)には喜多酒造組合が設立され、大正3年(1914)刊行の『喜多郡の華』によると、明治期の終わり頃には内子の酒が全国博覧会において1等賞を獲得したこともある。その流れをくむ酒造会社が現在内子と五十崎それぞれに1軒ずつ操業を続けている。内子には明治26年(1893)創業の醸造業者もあり、地域の味を現代に伝えている。

在郷町として形成・発展してきた内子と五十崎の中心部は、今なお内子町の賑わいを受け継ぐ場でもある。それは、長く地域住民が大事に担って来た祭礼行事の営みにも見ることができる。また江戸後期から大正期に形作られたこれら町並みは、さまざまな営みによって現在まで生き続け、戦後の経済成長期の開発に流されることなく、地域住民により意思をもって残されたものでもある。それが町並み保存運動として今に受け継がれている。

■内子町における内子・五十崎中心部の位置

